

Ⅲ 調査結果の詳細

【報告書を読む際の注意】

- (注1) 集計（グラフや数表の数値）は、小数点第2位を四捨五入しており、数値の合計が100.0%にならない場合がある。
- (注2) 数値間の比較で大小関係を示す場合は、個々の選択肢の比率の差をとり、「・・・ポイントの差」という表現をしている。
- (注3) 回答比率（%）はウエイトバック後の数値である。ただし、図表中の「n」とは、回答者または該当者の実数（母数）を示す。
- (注4) 本調査の分析対象は、層化二段無作為抽出を行った標本から有効回収されたサンプルである。調査方法の特性上、分析対象者の属性は各属性の回収率の違い（年代別の回収率の差など）に依存する。したがって、分析対象者の属性構成比が必ず母集団のそれと一致するとは限らない。
- (注5) 本文中において、図表ではウエイトバック後の回答比率（%）を示しているが、地域無回答のサンプルはウエイトバックの対象としていないため、分析対象から除いている。そのため、母数と回答実数の合計とが一致するとは限らない。

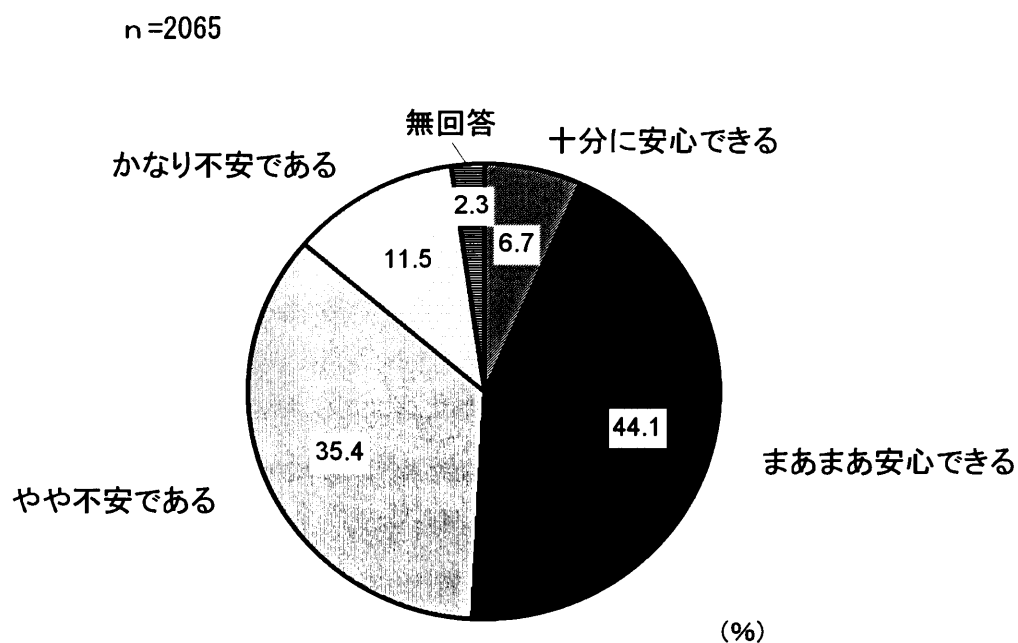
1 水源環境への認知度と考え方

(1) 上水道の水質に対する安心感 【問1 (SA)】

【全体の状況】

現在の上水道の水質の安全性について尋ねたところ、「まあまあ安心できる」(44.1%)が最も多く、次に「やや不安である」(35.4%)が続く。「十分に安心できる」(6.7%)と「まあまあ安心できる」を合わせた割合は過半数を占めるが、不安感をあらわす回答(「かなり不安である」(11.5%)と「やや不安である」との計)との差は3.9ポイントである。

図表1-1-1 上水道の水質に対する安心感

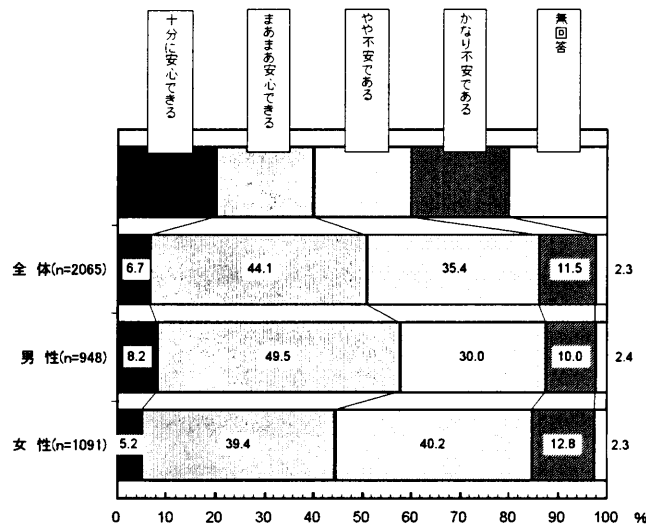


【性・年代別の状況】

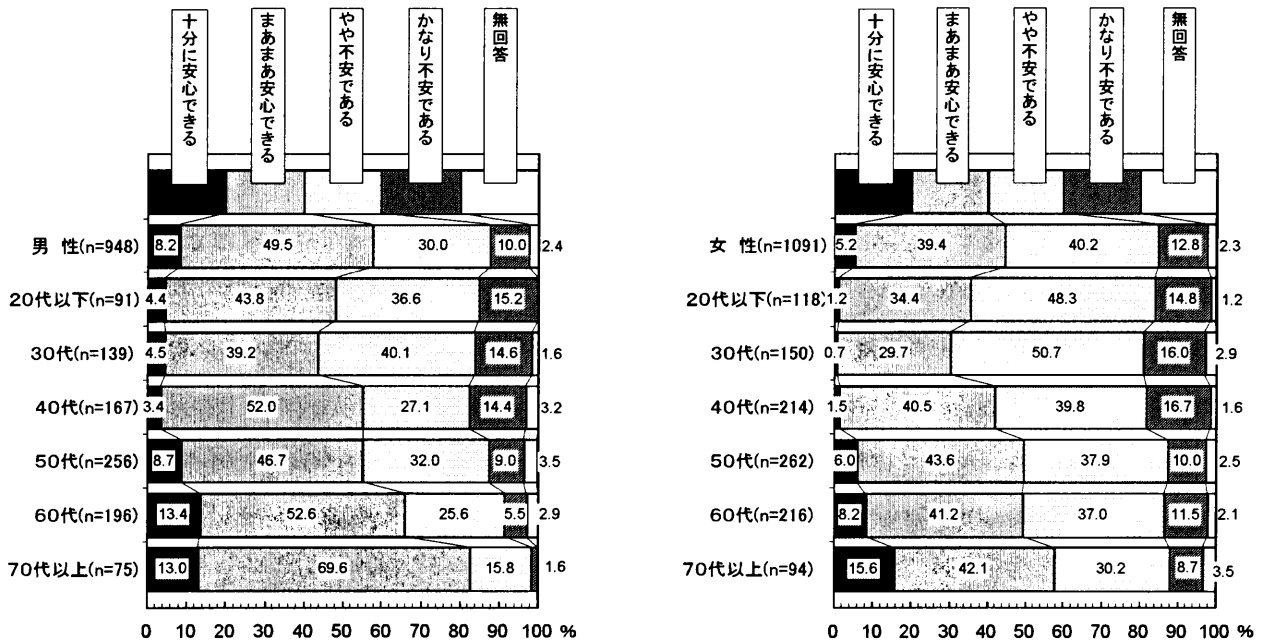
性別の比較をみると、安心感をあらわす回答（「十分に安心できる」と「まあまあ安心できる」の計）の割合は、男性（57.7%）が女性（44.6%）より13.1ポイント高い。

性・年代別でみると、男性では40代以降、年齢が高くなるにつれ、安心感を持つ回答者の割合は高くなり、60代で6割（66.0%）、70代以上では8割を超える（82.6%）。一方、女性においても同様の傾向にあるが、60代で49.4%、70代以上で57.7%と緩やかな増加にとどまっている。

図表1-1-2 上水道の水質に対する安心感（性別）



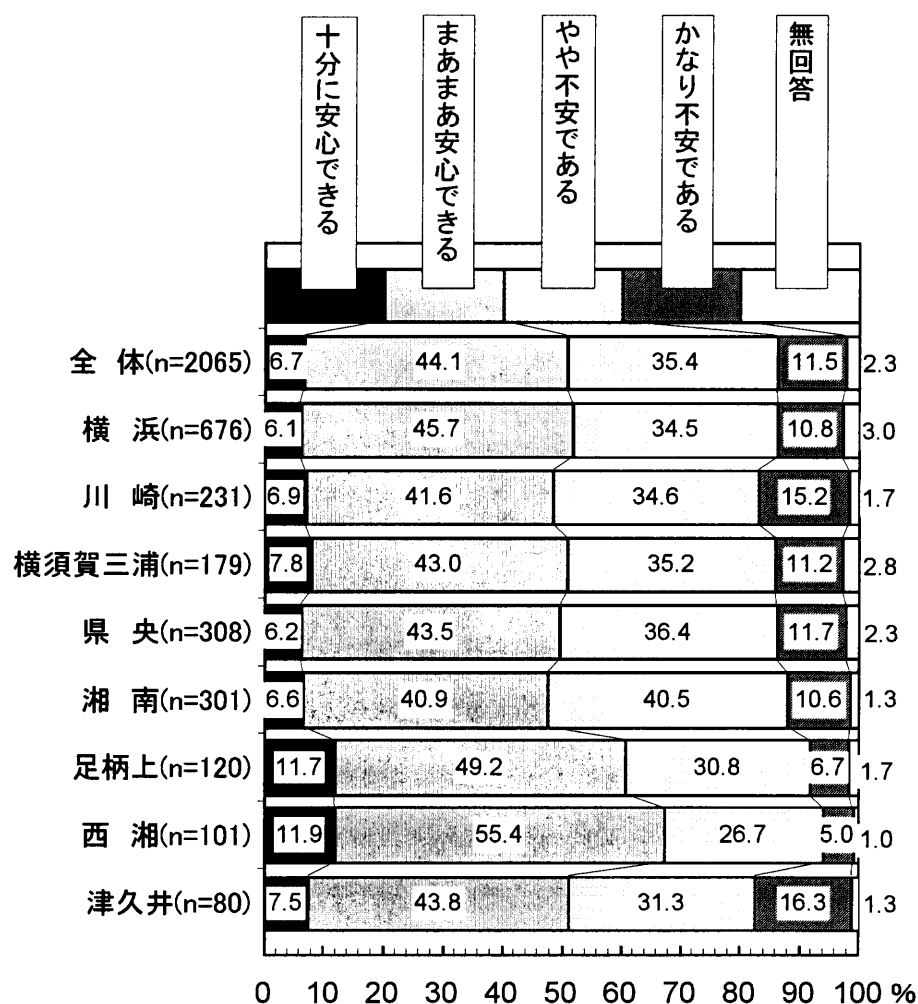
図表1-1-3 上水道の水質に対する安心感（性・年代別）



【地域別の状況】

地域別にみると、いずれも「まあまあ安心できる」が4割を超えて高い。足柄上、西湘の2地区では、「十分に安心できる」が1割以上と高く、安心感をあらわす回答（「十分に安心できる」と「まあまあ安心できる」の計）の割合は6割を超えている。一方、川崎、湘南の2地区では、不安感をあらわす回答（「やや不安である」と「かなり不安である」の計）の割合が安心感をあらわす回答の割合をわずかに上回っている。

図表1-1-4 上水道の水質に対する安心感（地域別）

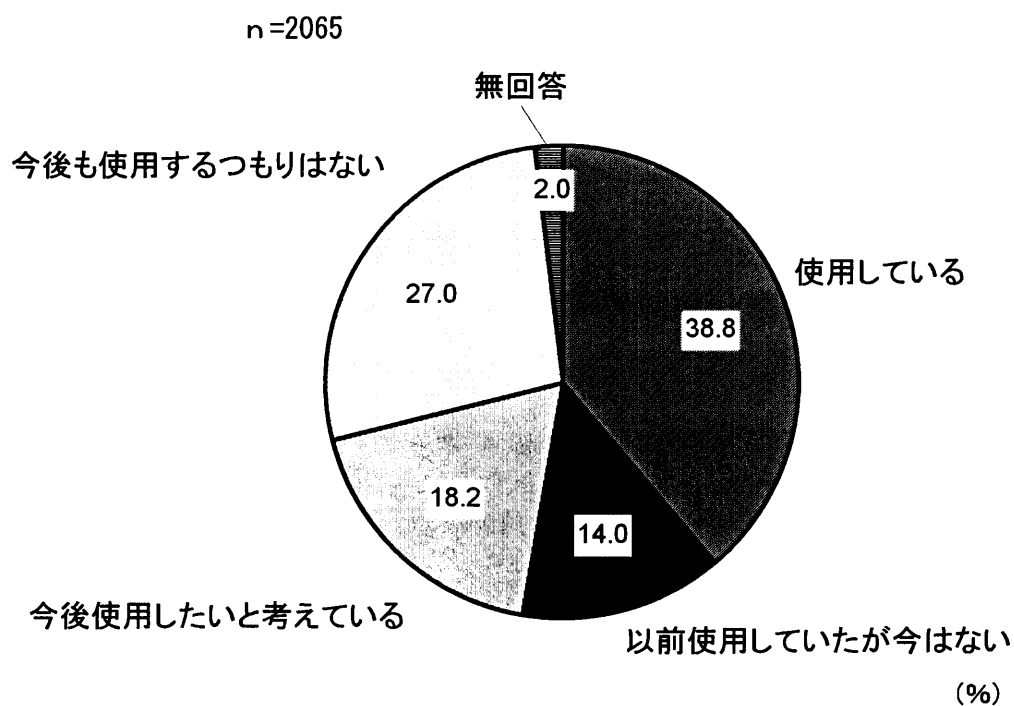


(2) 家庭における浄水器の利用状況 [問2 (SA)]

【全体の状況】

家庭での浄水器の使用状況を尋ねたところ、「使用している」(38.8%)が最も多く、次いで「今後も使用するつもりはない」(27.0%)、「今後使用したいと考えている」(18.2%)が続く。現在「使用している」と「今後使用したいと考えている」を合わせると過半数を占める。

図表 1-2-1 家庭における浄水器の利用状況

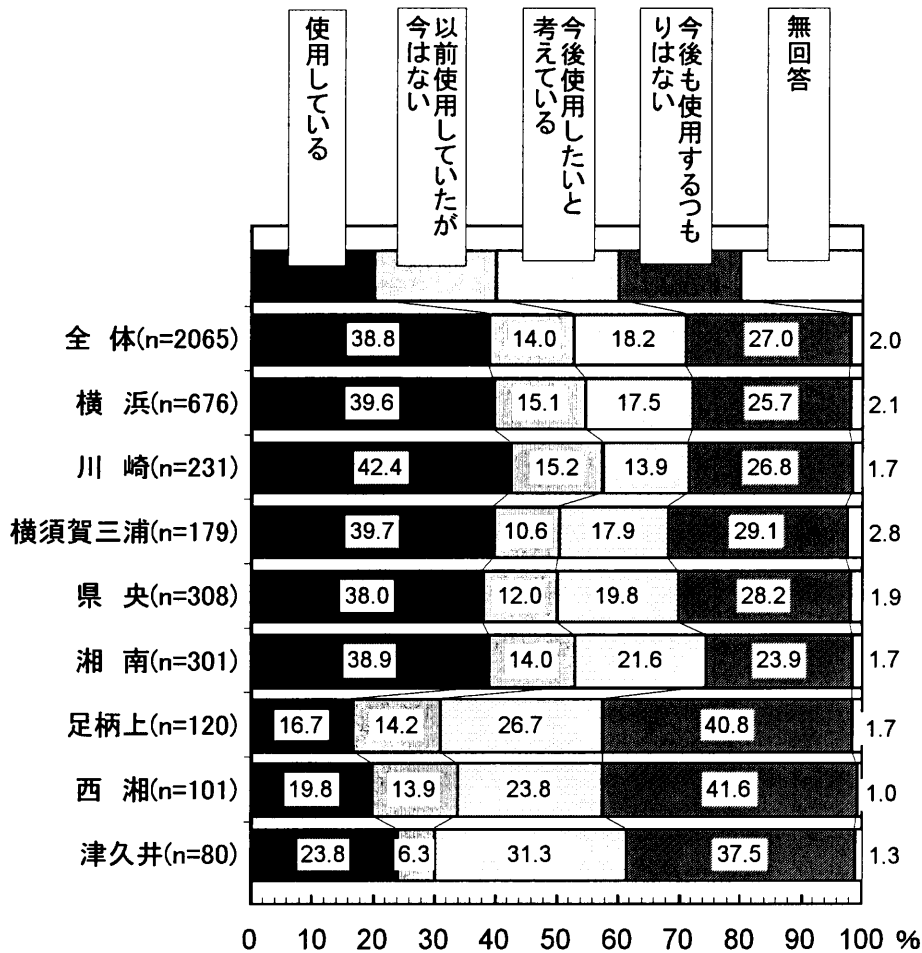


【地域別の状況】

地域別にみると、足柄上、西湘、津久井を除く5つの地域で、「使用している」が4割前後を占めている。最も使用率が高いのは川崎地域（42.4%）である。

足柄上、西湘、津久井ではいずれも「今後も使用するつもりはない」が最も高いが、その一方で「今後使用したいと考えている」も比較的高く、特に津久井（31.3%）は3割を超えている。

図表 1-2-2 家庭における浄水器の利用状況（地域別）

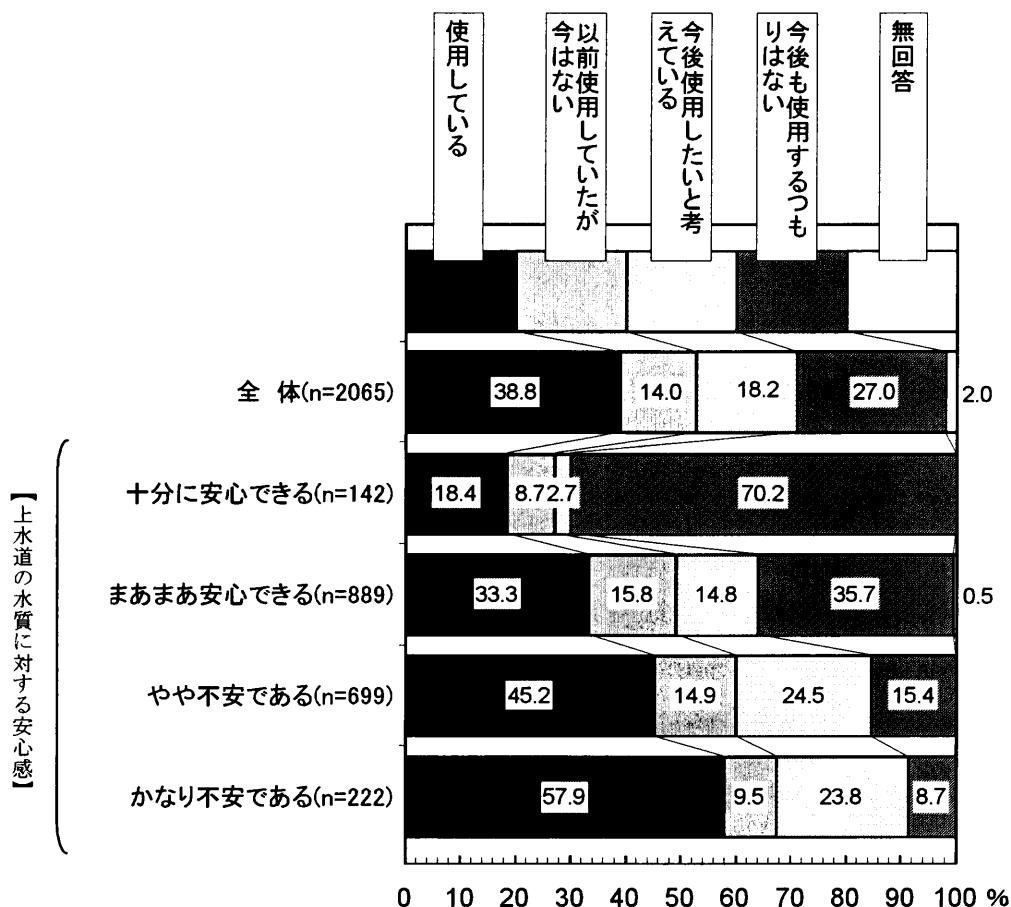


【「上水道の水質に対する安心感」別の状況】

上水道の水質に対する安心感別にみると、現在、家庭で浄水器を「使用している」割合は、上水道の水質に対し「かなり不安である」の回答者に高く（57.9%）、上水道の水質に対し「十分に安心できる」の回答者は低い（18.4%）。

水質に「十分に安心できる」の回答者の7割が、浄水器を「今後も使用するつもりはない」と回答している。逆に「今後使用したいと考えている」の割合は、水質を「やや不安である」の回答者や「かなり不安である」の回答者に比較的多くみられた。

図表 1-2-3 家庭における浄水器の利用状況（上水道の水質に対する安心感別）

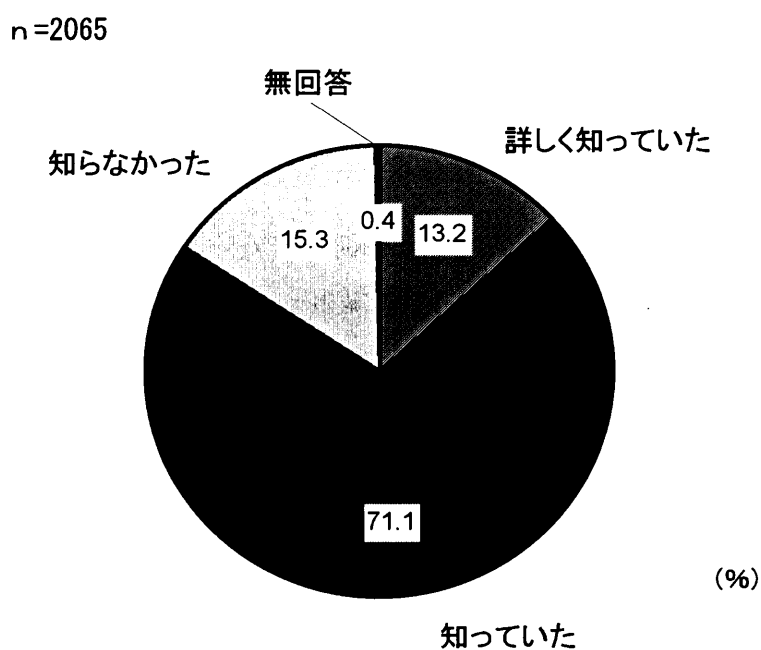


(3) 森林の水源かん養機能の認知度 [問3 (SA)]

【全体の状況】

河川の上流域にある森林が「水源林」としての役割を果たしていることについて認知の度合いを尋ねたところ、「知っていた」(71.1%)が最も多く、「詳しく知っていた」(13.2%)を合わせると8割以上の回答者が認知している。

図表 1-3-1 森林の水源かん養機能の認知度



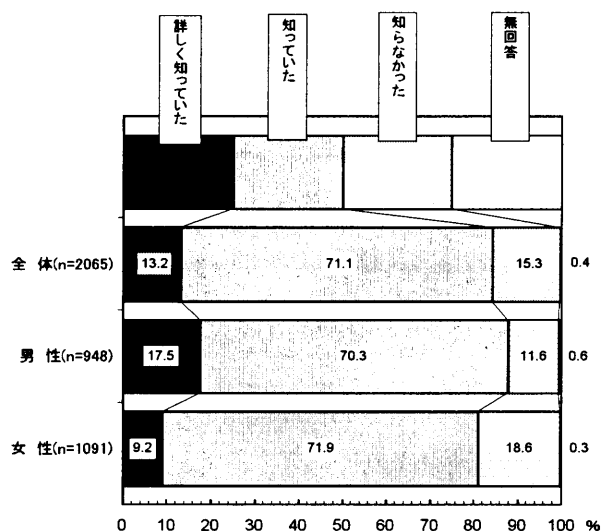
【性・年代別の状況】

性別の比較でみると、「詳しく知っていた」と「知っていた」をあわせた認知の割合は、男性（87.8%）が女性（81.1%）より6.7ポイント高い結果である。

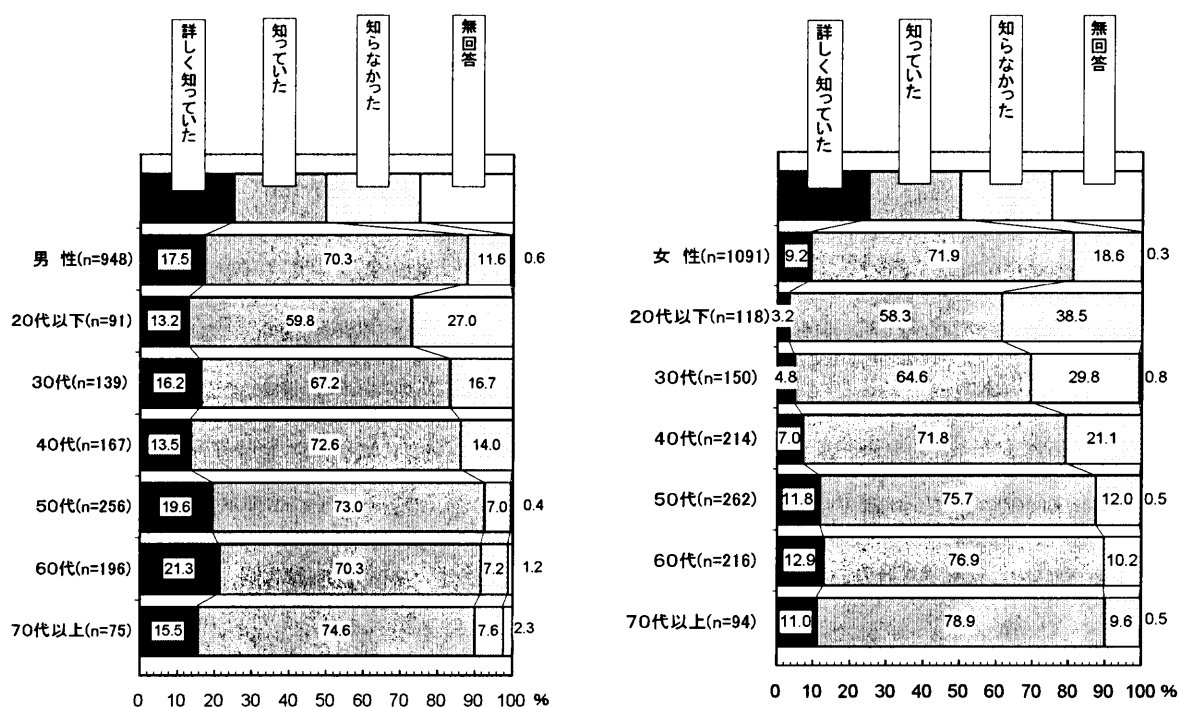
性・年代別でみると、男性では20代以下で認知の割合が減少するが、そのほかの年代では平均して認知の割合は高く、50代以上は9割を超えている。

一方、女性も年齢の高さとともに認知の割合は徐々に高くなり、60代以上で認知の割合はほぼ9割に達している。

図表 1-3-2 森林の水源かん養機能の認知度（性別）



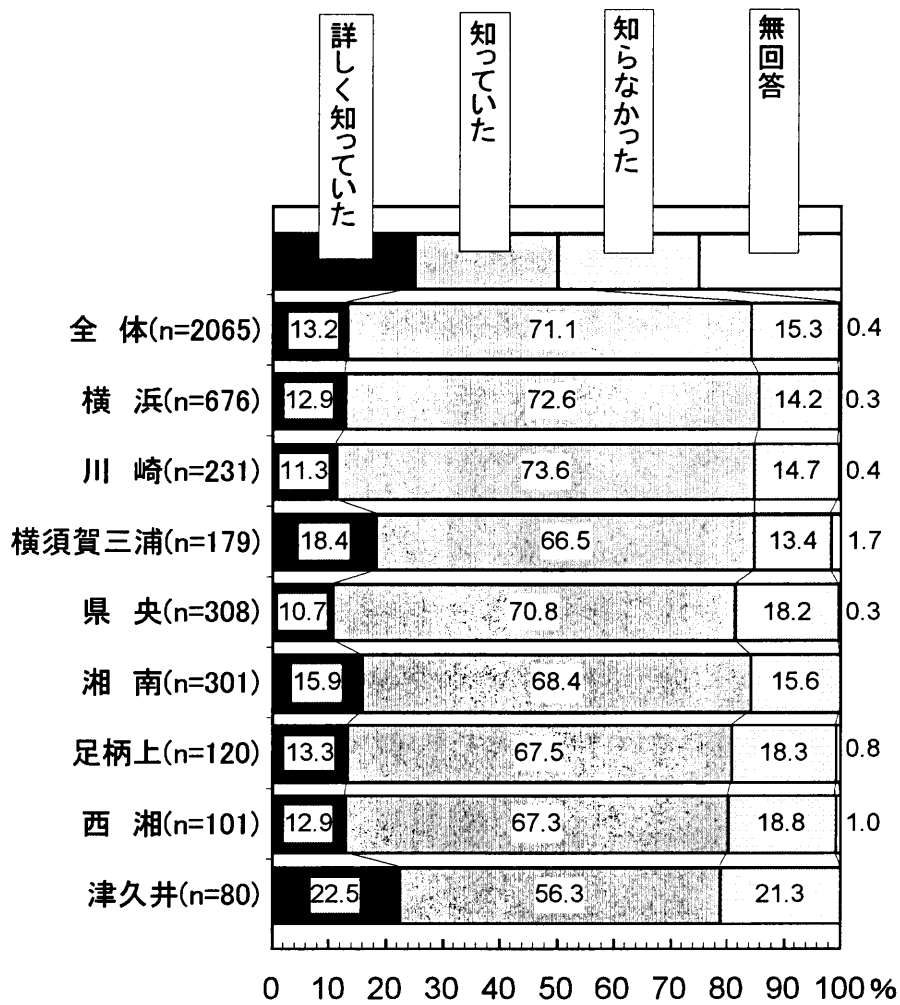
図表 1-3-3 森林の水源かん養機能の認知度（性・年代別）



【地域別の状況】

地域別でみると、津久井を除く地域ではいずれも8割以上が認知している。

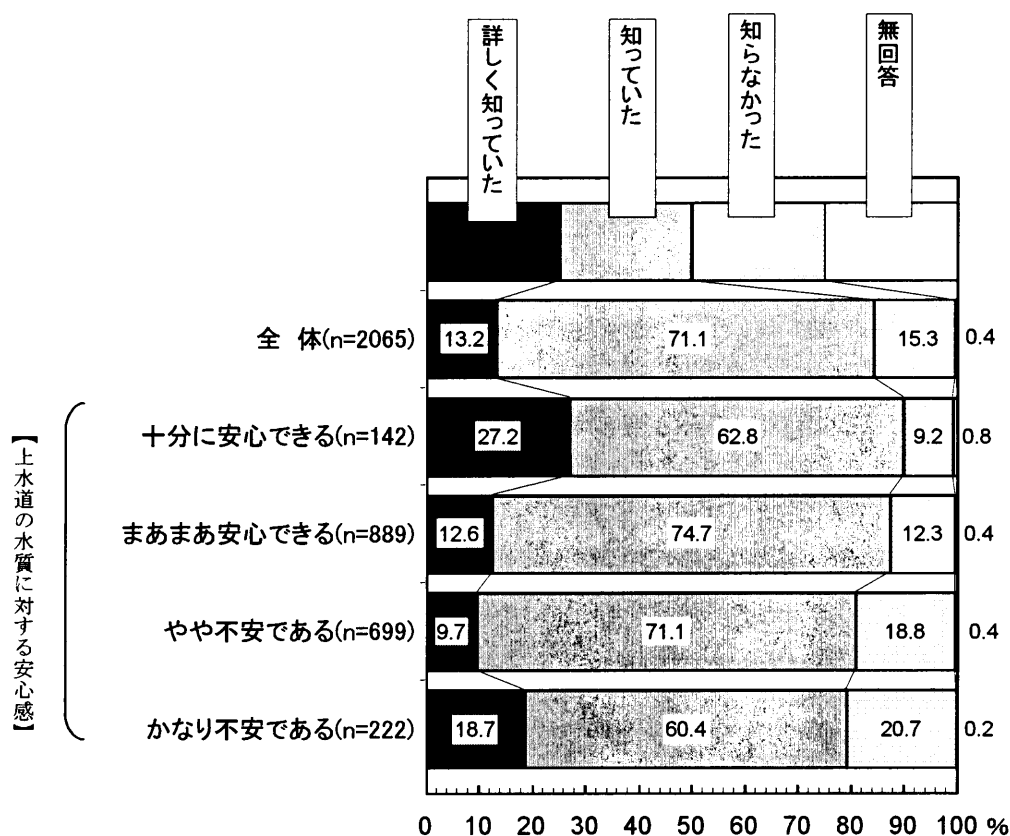
図表 1-3-4 森林の水源かん養機能の認知度（地域別）



【「上水道の水質に対する安心感」別の状況】

上水道の水質に対する安心感別にみると、森林の水源かん養機能を認知している割合（「詳しく知っていた」と「知っていた」の計）は、上水道の水質に「安心できる」の回答者に高い割合を示しており、特に、上水道の水質に「十分に安心できる」の回答者の認知の割合は 9 割（90.0%）に達している。

図表 1-3-5 森林の水源かん養機能の認知度
（上水道の水質に対する安心感別）

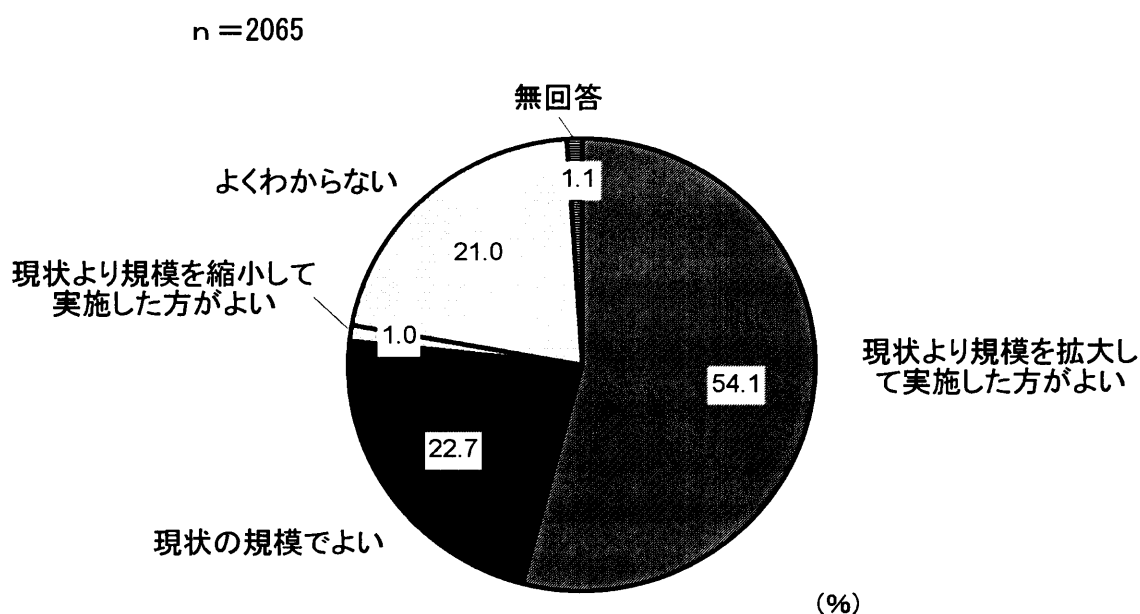


(4) 「水源の森林づくり事業」に対する考え方 [問4 (SA)]

【全体の状況】

平成9年より私有林の買取りや借上げなどにより確保し水源林として整備してきた「水源の森林づくり事業」について、今後の事業推進の方向に対する考え方を尋ねたところ、「現状より規模を拡大して実施した方がよい」(54.1%)が最も多く、次に「現状の規模でよい」(22.7%)が続く。「現状より規模を縮小して実施した方がよい」の回答は1%にとどまっている。

図表1-4-1 「水源の森林づくり事業」に対する考え方



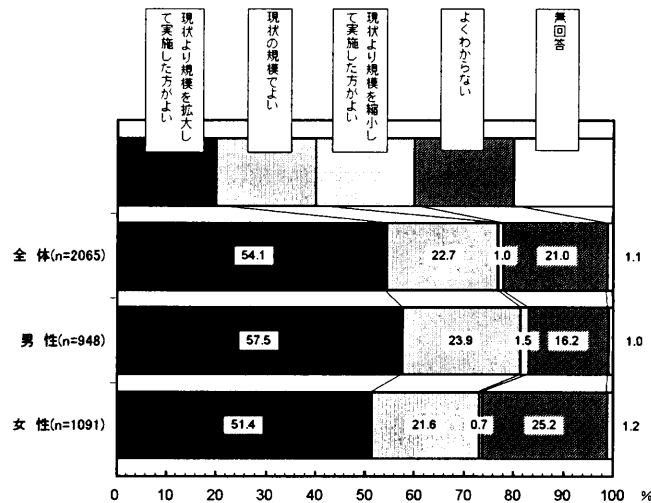
【性・年代別の状況】

性別の比較でみると、「現状より規模を拡大して実施した方がよい」の割合は、男性（57.5%）が女性（51.4%）を6.1ポイント上回っている。

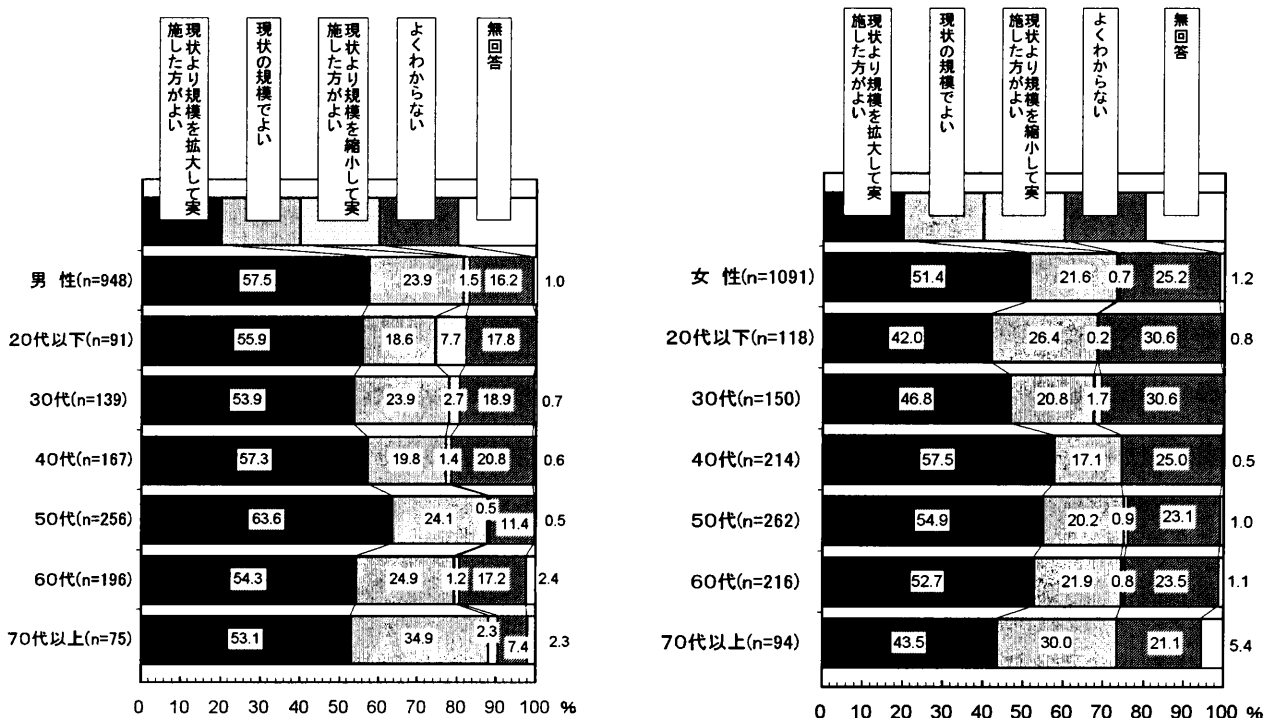
性・年代別でみると、男性では50代で「現状より規模を拡大して実施した方がよい」の割合は6割を超えて高い（63.6%）。女性では、「現状より規模を拡大して実施した方がよい」は40代（57.5%）で最も高く、それ以降の年代では徐々に減少する傾向がみられる。

男女ともに70代以上では、「現状の規模でよい」が3割に達している。（男性：34.9%、女性30.0%）。

図表1-4-2 「水源の森林づくり事業」に対する考え方（性別）



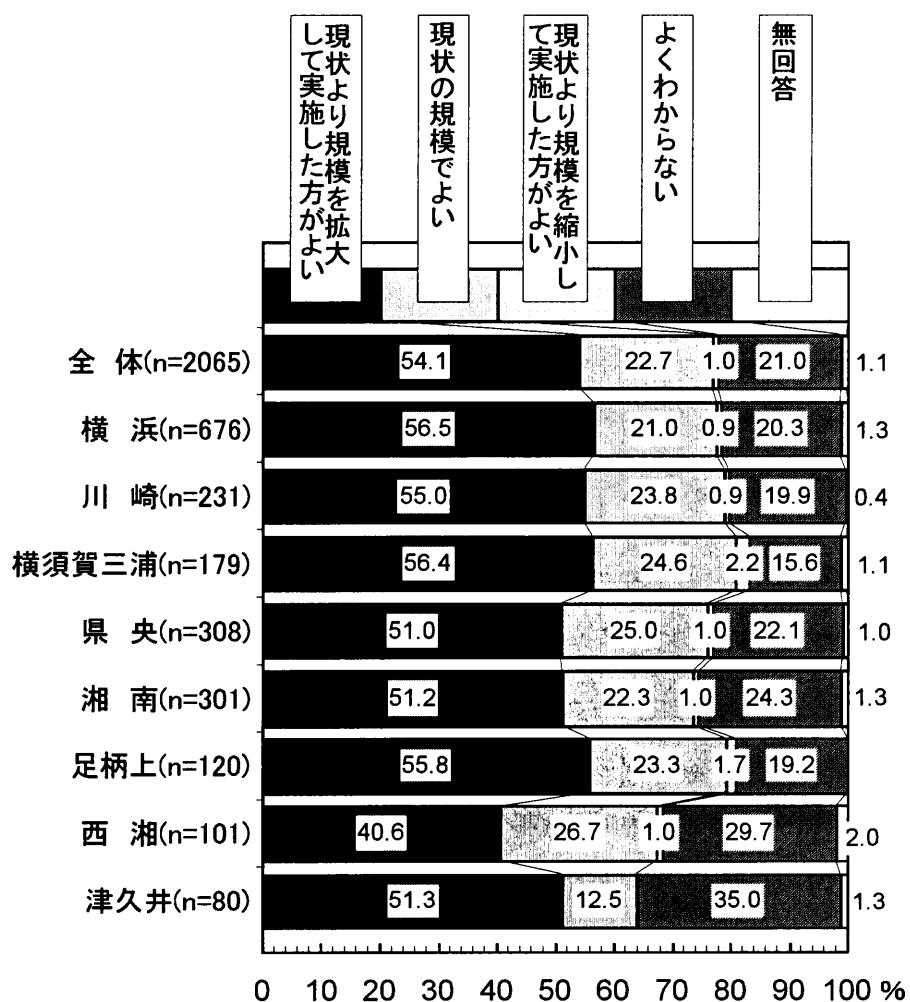
図表1-4-3 「水源の森林づくり事業」に対する考え方（性・年代別）



【地域別の状況】

地域別にみると、すべての地域で「現状より規模を拡大して実施した方がよい」の割合が最も高く、西湘を除いてはいずれも5割を超えている。次いで一様に「現状の規模でよい」が続く、地域別の差異は特にみられない。

図表 1-4-4 「水源の森林づくり事業」に対する考え方（地域別）

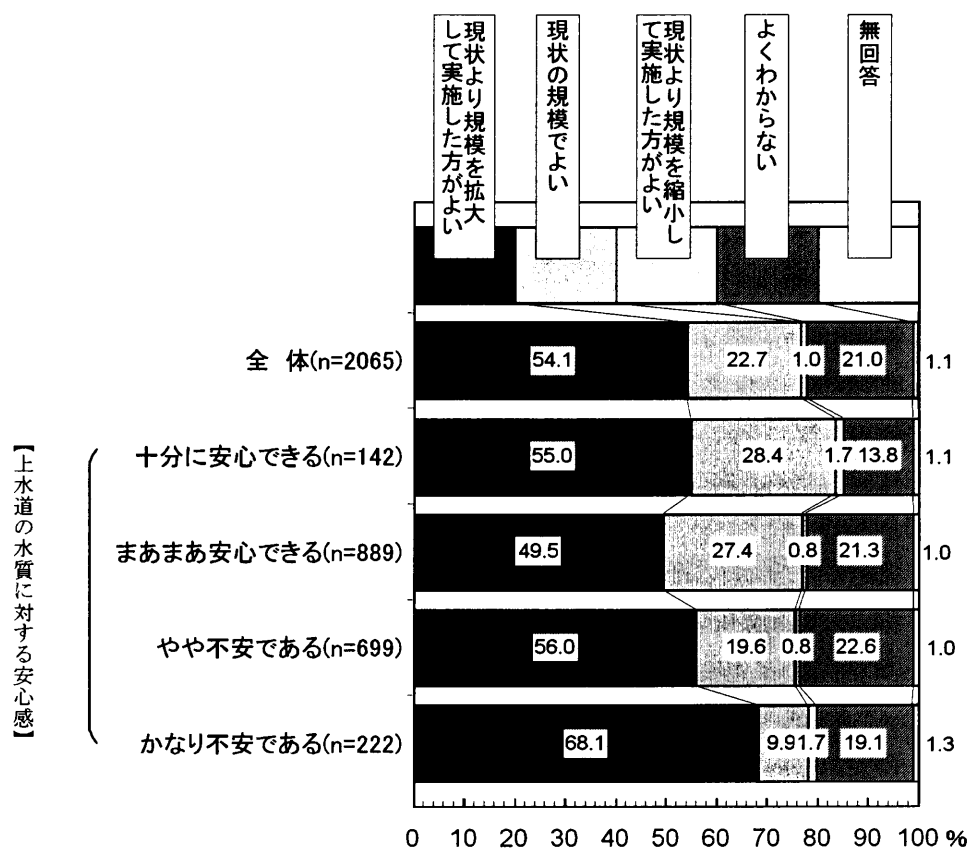


【「上水道の水質に対する安心感」別の状況】

上水道の水質に対する安心感別にみると、「現状より規模を拡大して実施した方がよい」の割合は、上水道の水質に「不安である」の回答者に多くみられ、不安感が強くなるほどその割合は高くなっている。

また、上水道の水質に「十分に安心できる」の回答者でも、全体結果を0.9ポイント上回る55.0%が「規模を拡大して実施した方がよい」と回答している。

図表1-4-5 「水源の森林づくり事業」に対する考え方
(上水道の水質に対する安心感別)

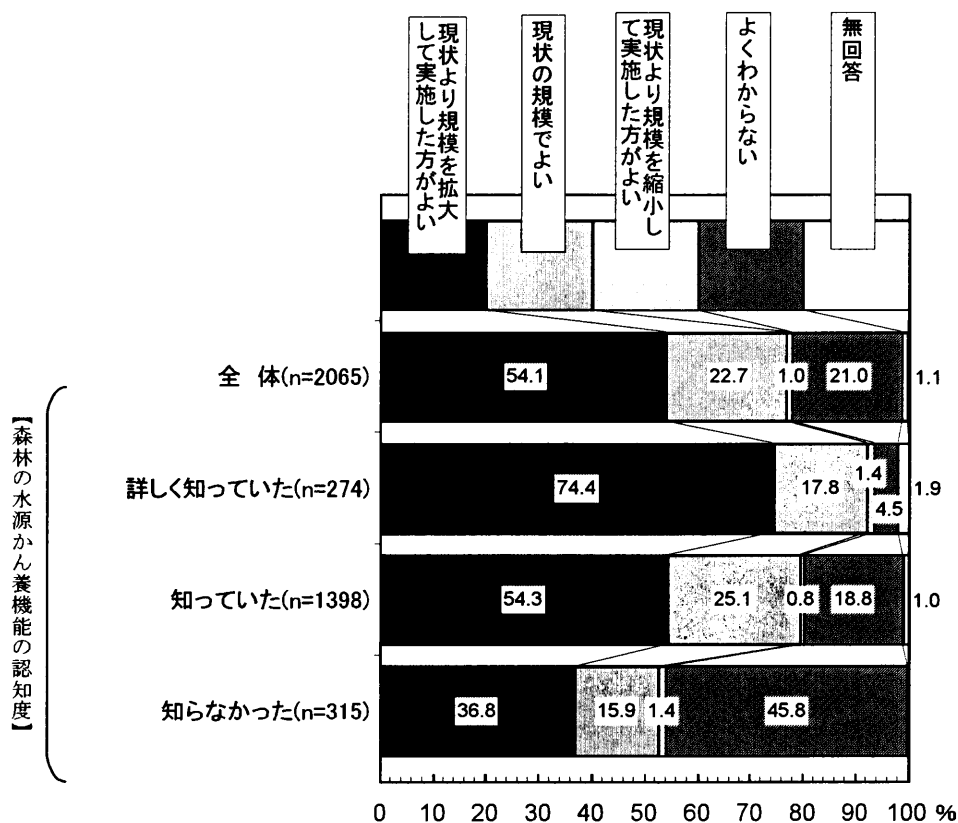


【「森林の水源かん養機能の認知度」別の状況】

森林の水源かん養機能の認知度別にみると、「現状より規模を拡大して実施した方がよい」の割合は、森林の水源かん養機能について「詳しく知っていた」の回答者に特に高い（74.4%）。

また、森林の水源かん養機能を「知らなかった」の回答者は、水源の森林づくり事業の今後について「よくわからない」と回答している割合が高い（45.8%）。

図表 1-4-7 「水源の森林づくり事業」に対する考え方
(森林の水源かん養機能の認知度別)

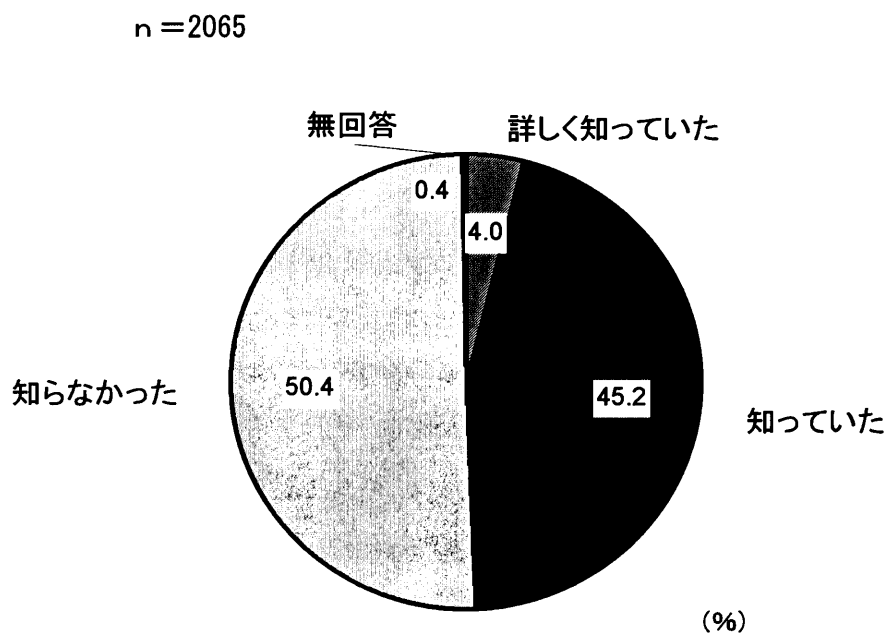


(5) 相模川上流ダム湖の水質に対する認知度 [問5 (SA)]

【全体の状況】

相模川の上流地域にある相模湖や津久井湖において、森林からの雨水や生活雑排水等が流れ込むことで、窒素・リンによる水質への影響が懸念されている状況について認知の度合いを尋ねたところ、「知らなかった」(50.4%)が最も多く、5.2ポイント差で「知っていた」(45.2%)が続く。「詳しく知っていた」(4.0%)を合わせても、認知している割合の方が1.2ポイント下回る。

図表1-5-1 相模川上流ダム湖の水質に対する認知度



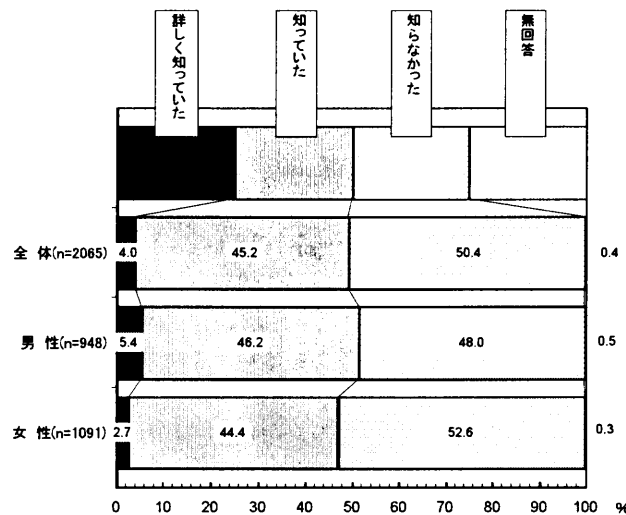
【性・年代別の状況】

性別の比較でみると、認知していたのは男性（51.6%）が女性（47.1%）より 4.5 ポイント多く、「知らなかった」のは女性の方が 4.6 ポイント高い。

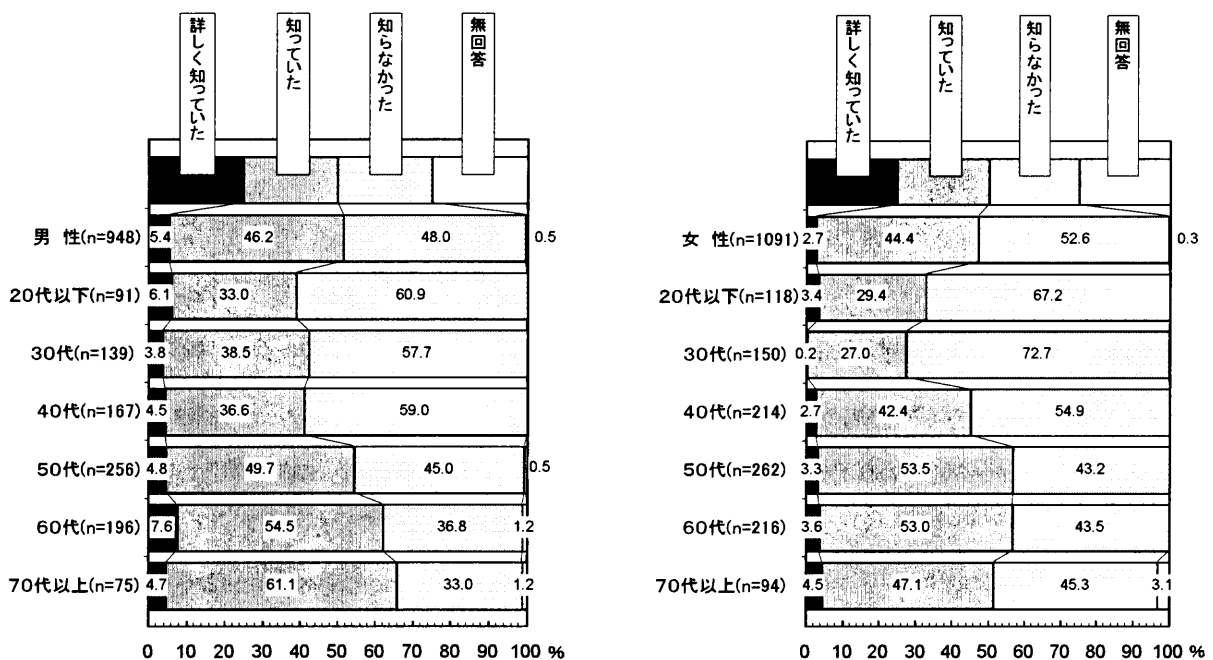
性・年代別でみると、男性は年代が高くなるにつれ認知度は高まる傾向にあり、60～70代以上では 6 割以上が認知している。

女性は 50～60代で認知度は高まるものの 6 割弱に止まっている。しかし、40～50代では女性が認知している割合の方が男性を 2～4 ポイント上回っている。

図表 1-5-2 相模川上流ダム湖の水質に対する認知度（性別）



図表 1-5-3 相模川上流ダム湖の水質に対する認知度（性・年代別）

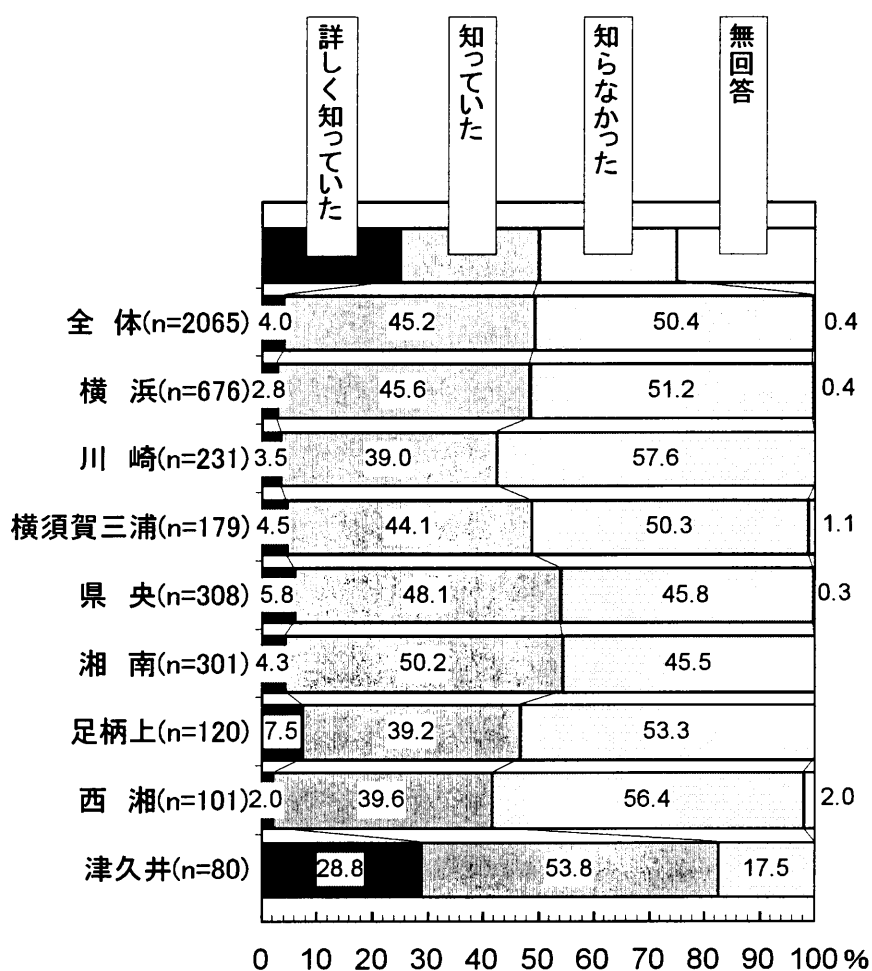


【地域別の状況】

地域別にみると、県央、湘南では認知度は5割を超え、また相模川の上流地域である津久井では8割以上が認知している。

「知らなかった」の割合が最も高いのは川崎（57.6%）で、次に西湘（56.4%）である。

図表1-5-4 相模川上流ダム湖の水質に対する認知度（地域別）



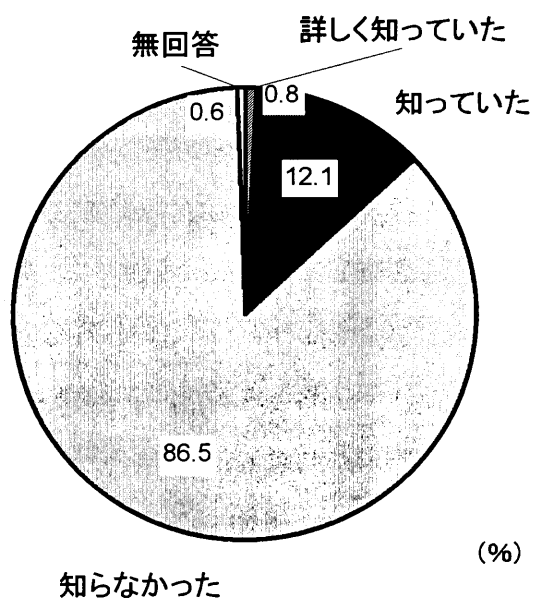
(6) 相模川上流地域の生活排水処理率に対する認知度 【問6(SA)】

【全体の状況】

相模川の上流地域（津久井町・相模湖町・藤野町）において、公共下水道や合併処理浄化槽等の生活排水処理施設整備が遅れている状況について、認知の度合いを尋ねたところ、「知らなかった」（86.5%）が8割以上を占めている。

図表 1-6-1 相模川上流地域の生活排水処理率に対する認知度

n = 2065



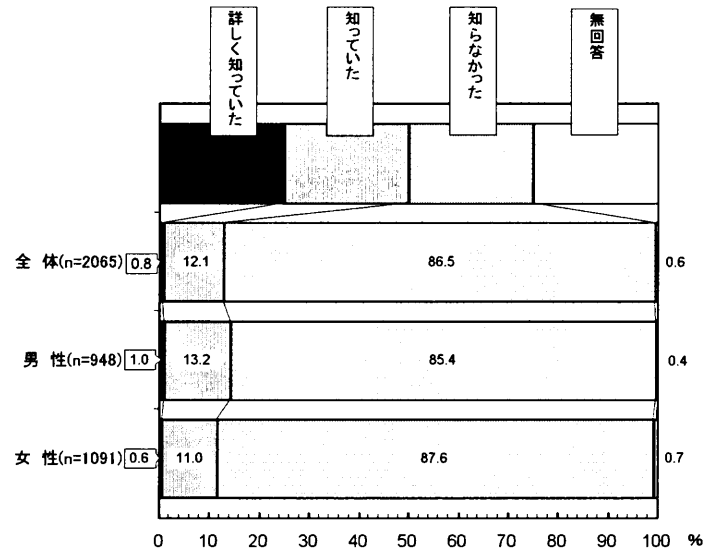
【性・年代別の状況】

性別の比較でみると、「知らなかった」割合は女性が男性より 2.2 ポイント高い。

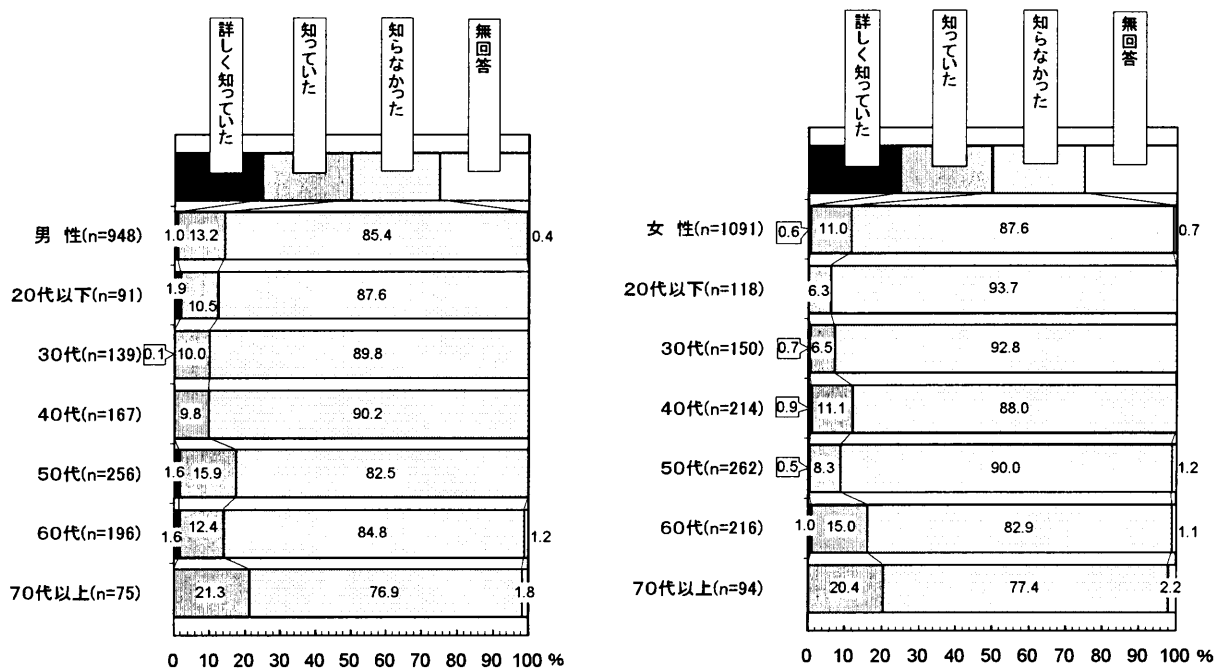
性・年代別でみると、男性では、40代で「知らなかった」の割合は 9 割を超えて高い。女性では、20 代以下、30 代、50 代において 9 割が「知らなかった」と回答している。

男女ともに、70 代以上で「詳しく知っていた」は 2 割以上で、相対的に高い結果である。

図表 1-6-2 相模川上流地域の生活排水処理率に対する認知度（性別）



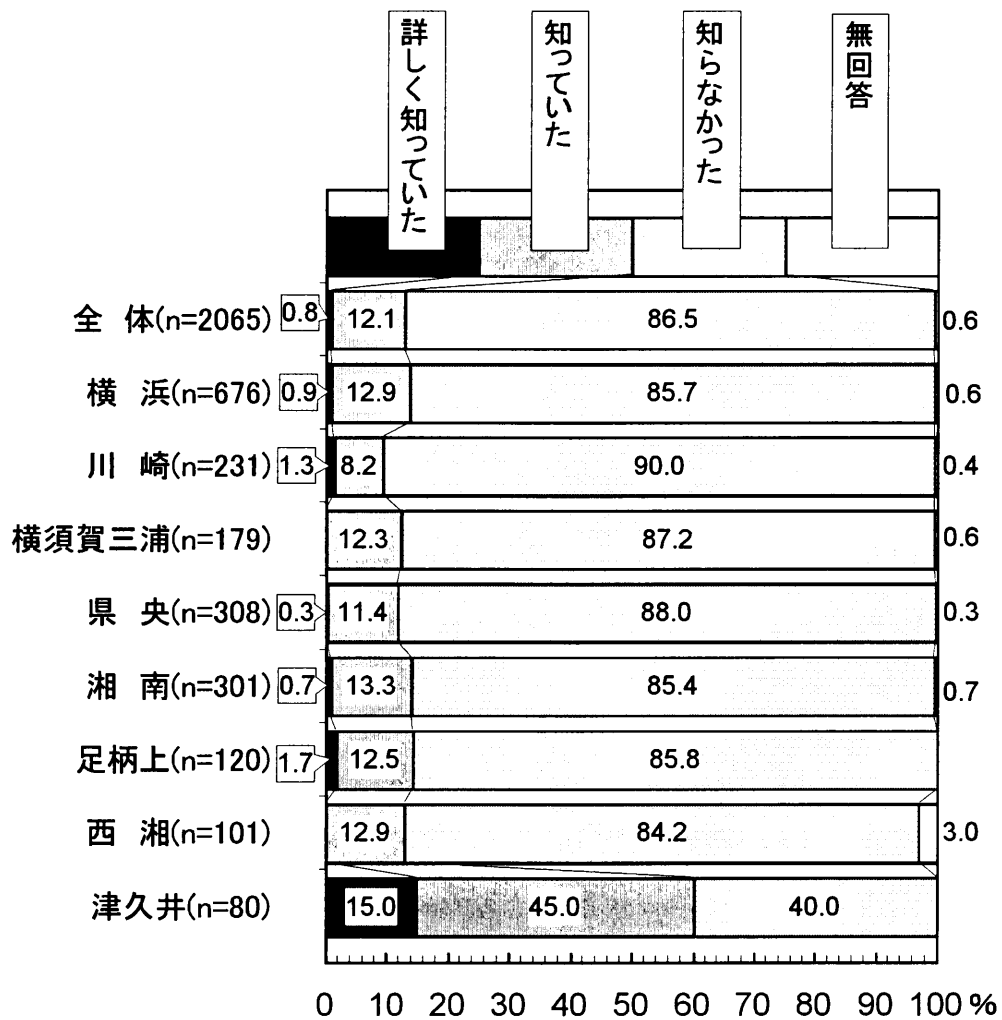
図表 1-6-3 相模川上流地域の生活排水処理率に対する認知度（性・年代別）



【地域別の状況】

地域別にみると、津久井を除く地域では「知らなかった」が8~9割を占めており、大きな差異はみられない。津久井では6割が認知していた。

図表 1-6-4 相模川上流地域の生活排水処理率に対する認知度（地域別）



【「相模川上流ダム湖の水質に対する認知度」別の状況】

相模川上流ダム湖の水質に対する認知度別にみると、相模川上流ダム湖の水質の状況を「詳しく知っていた」の回答者において、生活排水処理率について認知していた割合（50.4%）が高くなっている。

相模川上流ダム湖の水質に対する認知度が低いほど、生活排水処理率についても「知らなかった」割合が高くなっている（96.0%）。

図表 1-6-5 相模川上流地域の生活排水処理率に対する認知度
(相模川上流ダム湖の水質に対する認知度別)

